

第 92 回輸送計画委員会議事の記録

1. 日 時：令和 3 年10月18日（月）15:00～16:30

2. 場 所：オンライン開催（※文部科学省 研究開発局 1 会議室）

3. 出席者：

（委員）

青山 剛史 国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構航空技術部門
数値解析技術研究ユニット長

飯島 朋子 国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 主任研究開発員（欠席）

石坂 丞二 国立大学法人 東海国立大学機構名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授

宇都 正太郎 国立大学法人北海道大学 北極域研究センター 教授

梅村 行男 独立行政法人 航空大学校 特任教授

大沢 直樹 国立大学法人 大阪大学大学院工学研究所 教授

沖野 郷子 国立大学法人 東京大学大気海洋研究所 教授

庄司 るり 国立大学法人 東京海洋大学学術研究院 理事・副学長

土屋 武司 国立大学法人 東京大学大学院工学系研究科 教授

万谷 小百合 独立行政法人 海技教育機構海技大学校航海科 准教授

玉越 崇志 防衛省人事教育局人材育成課長（代理：防衛省人事教育局人材育成課
福原 知大課員）

萩原 祐史 防衛装備庁プロジェクト管理部事業監理官（艦船担当）（欠席）

射場 隆昌 防衛装備庁プロジェクト管理部事業監理官（航空機担当）（欠席）

里見 晴和 防衛装備庁長官官房艦船設計官付主任設計官（欠席）

木下 治信 防衛省海上幕僚監部装備計画部艦船・武器課長（代理：酒井 洋飛 防衛省
海上幕僚監部装備計画部艦船・武器課船体班長）

大塚 裕孝 防衛省海上幕僚監部装備計画部航空機課長（代理：日田 豊久 海上幕僚監
部装備計画部航空機課回転翼班長）

一柳 公大 防衛省海上幕僚監部防衛部装備体系課長（代理：佐藤 信一 防衛省海上 幕僚監部
防衛部装備体系課艦船体系班員）

齋藤 一城 防衛省 海上幕僚監部 防衛部 運用支援課 南極観測支援班長

伊藤 真澄 国土交通省総合政策局技術政策課長（欠席）

中山 理映子 海上保安庁 総務部 政務課長（代理：楠 勝浩 海上保安庁海洋情報部沿岸調査課長）

吉本 直哉 海上保安庁装備技術部航空機課長

野木 義史 国立極地研究所 総括副所長

大土井 智 文部科学省 研究開発局 海洋地球課長

盛田 謙二 国立極地研究所 南極観測センター 副センター長（事業担当）
（オブザーバー）

中村 卓司 国立極地研究所 所長（欠席）

榎本 浩之 国立極地研究所 副所長

伊村 智 国立極地研究所 副所長

牛尾 収輝 第63次南極地域観測隊長（兼夏隊長）

澤柿 教伸 第63次南極地域観測隊副隊長（兼越冬隊長）
（事務局）

吉野 明 文部科学省 研究開発局 海洋地球課 極域科学企画官

小野寺 多映子 文部科学省 研究開発局 海洋地球課 課長補佐

4. 議 事：

- (1) 事務局より、当日の議題・配布資料について確認があった。
- (2) 以下の議題について、報告及び審議がなされ、審議事項については、意見のあった点について必要な修正をした上で総会に諮ることが了承された。

《報告事項》

1. 前回議事について
2. 南極観測実施責任者評議会（COMNAP）の状況について
3. 第62次南極地域観測隊越冬隊の現況について
4. 令和3年度「しらせ」の年次検査について
5. 令和4年度南極地域観測事業概算要求の概要について

《審議事項》

6. 第63次南極地域観測行動実施計画（案）等について
7. その他

主な意見は次のとおり。

(議題 2)

【梅村委員】 南極観測実施責任者評議会 (COMNAP) の状況 1) Round1 “Townhall Meetings” での議論において、「『COVID-19感染拡大予防・管理ガイドライン』」は、各国の対策を策定する上で大変有効であった。また、取られた対策により、このような状況でも、各国の設営面での相互協力や複数国が関与する緊急搬送も行われた。」とあるが、緊急搬送について具体的にどのような事案であったのか。

【野木国立極地研究所総括副所長】 緊急搬送が起こったのは、オーストラリアのデービス基地、12月に1名の患者が発生し、近くを航行中の中国の船からヘリでデービス近くの内陸に数名を送り込んで氷上の滑走路を構築、そこにアメリカのスキーを履いたバスラーらが飛んできて、患者をピックアップして、オーストラリアの通常の空港路で帰れるウィルキンソンの航空基地に送り込んで、無事にホバートに患者は戻ったというのが緊急搬送の経緯である。

【大沢主査】

ガイドラインで各国の対策に方針が示されたということだが、いわゆる出口戦略のようなものは、まだ審議には全く着手できない状態か。こういう状況になったら COVID 対策をだんだん緩めていくというようなことは、まだまだ時期尚早で議論は始まっていないということによろしいか。

【野木国立極地研究所総括副所長】 ご理解の通り出口戦略を検討する状況には至っていない。現状を認識しながら、対策を取りながら観測を行っているところ。

(議題 5)

【大沢主査】 海上輸送部門経費のところ、故障している 93 号機から調査を行って使える部品は確保するとのことだが、それは今年度限りの経費か。一度、現有の部品の利用の機材を今回確保すれば、毎年同じように費用が発生するようになるものなのか。

【吉野文科省海洋地球課極域科学企画官】 令和 4 年度の概算要求の内容に関して、まずはヘリに使う部品を確保するという観点であり、今回の措置により、93 号機の中から、91 号機、92 号機に使えるパーツを取り出す調査をして使用するという行為に関しては、これ一度となる。ただ、それ以降の進め方について、引き続き、防衛省とも相談をしながら検討を進めていきたい。

(議題 6)

【宇都委員】 第 62 次と第 63 次でフリーマントルに寄港するというのが大きく違っているが、フリーマントルで物資搭載等行う際の感染対策はどうお考えか。また、「新型コロナウイルス関係で往路の行

動計画に大幅な変更が生じた場合の対応について」に記載の3つの対応案について、それぞれ、何を判断材料にして、いつのタイミングで決断するとか、具体的には決められているのか、イメージ、想定を聞かせていただきたい。

【吉野文科省海洋地球課極域科学企画官】フリーマントルの寄港では、給油等の補給は予定しているが、下船は一切行わない形で実施するというので、感染防止を図っていききたい。また、それぞれのケースに応じて適切に判断することが必要になってくるかと思うが、いずれにしても、隊員の方を交代しても「しらせ」で南極に行けないような場合にあっては、「しらせ」で第62次隊の方の収容を優先するという御判断になるかと考える。まさに、それぞれの事例でもっての判断になろうかと考えている。

【梅村委員】第63次においては、本隊、先遣隊、別動隊があるということで、「海鷹丸」のことも別動隊として動かれるということだが、「しらせ」による収容ができない場合は、他国船・航空機による収容を行う、こういったクリティカルな状況も想定において、「海鷹丸」も選択肢の中に入っているものか。2つ目に、いわゆる連携するという状況の中では、そういった状況も想定されているか。また、緊急時に備えていわゆる昭和基地の近隣の他の国、そういった特定の国が、あらかじめ調整可能なものか。3つ目に緊急時に、もし隊員交代が不可能な見込みになった場合には、第62次越冬隊の収容のみを行うということだが、越冬隊不在の状況でも基地には問題が生じないものか。

【吉野文科省海洋地球課極域科学企画官】「海鷹丸」との連携については、対応可能な状態であればお願いすることもあるかもしれない、その状況に応じてと思うところ。2つ目、他国については、近いところではオーストラリアというのは想定されるが、やはり、それぞれの国あるいはその状況に応じて、適時、対応することになると考えているところ。3つ目、昭和基地が無人になることの支障はあり、その後の復旧にはかなりの時間等がかかるがやはり人命第一と考えたときに収容のみ行うケースも想定している。

【万谷委員】新型コロナウイルス関係で行動計画に大幅な変更が生じた場合の対応について、フェーズにより、どういった対応をするかというのが一目瞭然になるように表に纏められる等、誰でも分かるようにされたら良いのではないか。また、越冬隊の交代と物資の輸送を基本とするということに加え、昨年できなかった観測等も実施される計画になっており、こちらについては問題ないかと思っている。

【野木国立極地研究所総括副所長】補足として、先遣隊について情報を更新させていただく。こちらの計画で13日、無事に日本を出発したが、ヨハネスバーグで航空機の遅延で1日遅れ、現在はケープタウンで2週間の隔離に入っているところ。大陸間のフライトで、ケープタウンからロシアのノボラザレフスカヤ基地までの便に同乗するはずのロシア隊員が1日遅れ、今回28日にケープタウン発の予定だが、現

時点では10月30日となっている。

【大沢主査】第63次南極地域観測行動実施計画のうち夏期行動・輸送計画のC案(空輸のみ)の場合は、CH101は2機運用で想定されているところか。

【牛尾第63次観測隊長】仰る通り、2機運用で計画している。

【宇都委員】リュツォ・ホルム湾の海氷の状況について、データを見ると、結構、オングル海峡の氷もしっかりしており、湾の中央側の切れ込みも少ない。例年に比べて少ないかどうか分からないが、結構厳しい状況が想定されるのではないかなという気がするところ、どうお考えか。

【牛尾第63次観測隊長】おっしゃるとおり、割れていなくて、昨年から残っている箇所、議事資料6-2 2021年8-9月の湾内定着氷変化のスライド、衛星画像で出されている白くべったりしたところ、特に赤い丸の昭和基地から北西方面、「しらせ」の進入路に当たるが、ここは多年性の氷になっており、昨年よりは氷が厚くなっていると考えている。ただ、これは、そのときに、氷も当然、完全に均一、均質ではないので、少し場所が変わると、比較的、船が進みやすかったり、反対に厳しかったり、なかなか進めないということもある。ただ、昨年と比べますと、残っている氷のところは厚くなっていると見ており、昭和基地の近くの弁天島、優先空輸であるとかS16方面にヘリコプターを飛ばすという、その辺りに達するまでどれくらい厳しいかというのは、量的に申し上げることはなかなか難しいが、楽観はしていない。

【梅村委員】行動実施計画のうち、ドームふじ基地方面でのオペレーションについて、DROMLANを使って、1回目は現地入りという表現になっているが、これはS16から、いわゆるドームふじ基地まで900キロ程度、そこに直接、DROMLANの飛行機を使って行くのか、回転翼機を使うのか、固定翼機なのか、滑走路の状況がどうなっているのか教えていただきたい。

【牛尾第63次観測隊長】既に先遣隊として出発し、ケープタウンで隔離中のメンバーが、DROMLANでS16に入る。そこで、第62次隊と合流して、旅行隊を編成して内陸に向かうというのが1回目の往復旅行、期間が11月から12月である。また後で「しらせ」到着後、ヘリコプターでさらに人員や物資の送り込みを行う計画である。

(その他)

【大沢主査】昨年度の報告、前回の本部総会でもいろいろな御意見があったが、昨年、風力発電装置の設置を試みて、これが壊れて、問題があった旨の御報告をいただき、何で壊れたかも含めて、きちんと調査が必要でしょうといったことになっておったのかと思うが、今年度の計画では、風力発電装置が資料にないのだが、これは時間をかけて再挑戦するため、風力発電は今年の計画から外しているという理解で

よろしいか。

【牛尾第 63 次観測隊長】 これまで、風力発電を建設して不具合があったところ、極地研究所をはじめ、関係の方々の御協力も得て、原因であるとか、究明しているところ。

【樋口国立極地研究所南極観測センター設営業務担当マネージャー】 新しい風力発電の建設は特に予定はしていない。以前に御報告した 3 つある風力発電施設の 2 号機の復旧のめどは立っていない。それから、ノイズが発生していた 3 号機については、ノイズ除去の措置を行う方向で対応を予定している。1 号機は補強が終わっているので、徐々に、様子を見ながら復旧を試みている段階である。

(3) 事務局から次回の会議日程については、委員の都合を確認の上、連絡する旨の説明があった。

— 了 —

以上